詩作と歴史
――アイスキュロス『ペルシアの人々』とヘロドトス『歴史』――

小川　彩子

序

アリストテレス『詩学』では、「詩作（ποίησις）」の如何になすべきであるかが議論される。ここにおいて中心的に論じられる「詩作」の指示する対象が、悲劇と叙事詩であるといっても構わないだろう(1)。悲劇や叙事詩といった叙述が、詩人の手によって制作的に〈作られたもの〉として扱われ、こうした叙述をなす詩人の制作術を問うた著作が、『詩学』である。『詩学』では、優れた詩作をなすために制作者たる詩人に関してその技法が問われ、検討される。

『詩学』第9章には、詩人（ποιητής）と歴史家（ἱστορικός）との相違を比較する印象的な議論がある。ここでは、「詩作（ποίησις）」に対して「歴史（ἱστορία）」という項が導入され、「詩作」と「歴史」の特徴がそれぞれ対比的に論じられる。また、第23章でも、叙事詩の技法との比較において「歴史」が導入され、ここでも「歴史」

の特徴が叙事詩を代表とした「詩作」のそれと対比的に語られる。これらの箇所において、アリストテレスは「詩作」と「歴史」の特徴を明らかにするとともに、二つの叙述を明確に区別しようと試みる。

しかしながら、『詩学』において明らかとされる「詩作」と「歴史」の特徴は、一見きわめて単純なものであり、ある種自明の大前提を述べているに過ぎないようにも見える。また、これらの単純な特徴にしたがって「詩作」と「歴史」とを区別することにどれくらい意義があるか、目の前の歴史的叙述と詩作とを区別する際にどれくらい有効であるかは疑問である。

したがって、以下では、『詩学』第9章および第23章において、「歴史」に関して語られる場面に焦点を当て、アリストテレスの捉える「歴史」と「詩作」の特徴がそれぞれ如何なるものであるのか、また、「歴史」と「詩作」とが如何に区別されているのかを明らかにし、最終的には、「歴史」と「詩作」とが対比的に語られるとき、アリストテレスがそれらにどのような意味を見出しているのかを検討していく。以下の考察では、「歴史」の具体例としてヘロドトス『歴史』を、「詩作」の具体例としてアイスキュロス『ペルシアの人々』を取り上げ、アリストテレスの捉えた「歴史」や「詩作」の特徴が、実際の叙述において如何に展開されているのかを明らかにしながら、論を進める。

1. 『詩学』における「歴史」の導入

アリストテレスが述べるように、自然の順序にしたがって（κατὰ φύσιν）考察を進めるならば、その考察は、共通の問題からはじめて次第に特殊な問題へと展開していくものになるだろう(2)。『詩学』では、先ずは詩作一般に関して共通するであろう「再現」という事態に焦点を絞り、次いでその再現の媒体と対象とを検討し、最終的

には、再現の中でも特に悲劇や叙事詩という個々のジャンルへと問題を限定する、という手順で語られている。例えば、第6章では、問題を悲劇に限定し、その構成要素に関して述べ、さらに、第7章、第8章においては、悲劇の構成要素の中でも特に、ミュートスの組み立てを取り上げて、このミュートスに緊密な統一を要求する。

このような文脈に沿って、第9章冒頭では、「以上のことから、さらに次のことが明らかである」(9, 1451 a 36)と述べた上で、それまでに論じられてきたことにもとづいて、詩人の仕事が明らかにされる。このとき、詩人の仕事たる「詩作」に対応して「歴史」が導入され、「詩作」と「歴史」とが対比的に論じられる。これは、「歴史」という対比項を持ち込むことによって、「詩作」の特徴をより明確にすることが目的であると考えられる。

この「歴史」に関する記述は、唐突なものに感じられるかもしれない。しかしながら、自然な順序にしたがって語るアリストテレスの語り口からすれば、この「歴史」に関する記述の導入は、「詩作」の特徴を詩人の仕事という観点から明らかにするために不可欠なものであったといえるだろう。第6章から第8章にかけて、問題は詩作のミュートスに収束される。その上で、このミュートスに緊密な統一が要求される。ここにきて、第9章では、それまでに語られてきたミュートスやその緊密な統一が一体何を目指してのものなのかということを明らかにすべく、詩人の仕事という観点が持ち込まれるのである。

「詩人の仕事（ποιητοῦ ἔργον）は、すでに起こったこと（τὰ γενόμενα）を語るのではなく、起こりうることを（οἷα ἂν γένοιτο）、ありそうな仕方であるいは必然的な仕方で（κατὰ τὸ εἰκὸς ἢ τὸ ἀναγκαῖον）起こる可能性のあることを、語ることである。なぜなら、歴史家（ἱστορικός）と詩人（ποιητής）は、韻文で語るか否かという点によって異なるのではなく――事実、ヘロドトスの作品（τὰ Ἡροδότου）は韻文にすることができるが、しかし韻律の有無にかかわらず、歴史（ἱστορία）であることにいささかの変わりもない――、歴史家はすでに起こったこと（τὰ γενόμενα）を語り、詩人は起こる可能性のあること（οἷα ἂν γένοιτο）を語るということによって

異なるのだ。したがって、詩作は歴史にくらべてより哲学的（φιλοσοφώτερον）であり、より深い意義を持つもの（σπουδαιότερον）である。というのは、詩作はむしろ普遍的なこと（τὰ καθόλου）を語り、歴史は個別的なことを（τὰ καθ'ἕκαστον）語るからである。普遍的とは、どのような人物にとっては、どのような事柄を語ったり行ったりするのが、ありそうなことであるか、あるいは必然的なことであるか、ということである。詩作は、人物に名前をつけることによって、この普遍的なことを目指すのである。他方、個別的とは、たとえばアルキビアデスという人物が何をおこない、どんな目にあったのかということである」(9, 1451a36-b11)。

ここでは、「詩作」と「歴史」という二つの叙述が対比的に論じられている。この箇所によれば、詩人の仕事は、ある人物が何をなしたのかということではなくて、ある人物もしくはそのような性格を有する人間一般はこのようなことをなすであろうということを語ることであり、他方、歴史家は個々に「起こったこと（τὰ γενόμενα）」を語るのだということになる。したがって、この箇所において明らかとなるのは、詩作が「普遍」を狙ったものであるのに対して、歴史は起こった出来事を語るという形で「個別」を狙ったものであるということである。また、このことから、詩作にはより哲学的でより深い意義を持つという「優位」の性格付けがなされ、他方、歴史には「劣位」が付加される。そして、これらの特徴は、詩作がまさに詩人の「制作的」な仕事であるのに対して、歴史が「事実」に沿って歴史家の語るいわば非制作的なものであるということから導出されている。それは、第23章の言及においても明らかである。

第23章では、叙事詩の技法を説明する中で「歴史」が引き合いに出され、以下のように語られる。「また、出来事の組み立ては、歴史の場合とは異なったものでなければならない。すなわち、歴史においては、一つの行為についてではなく、一つの時間（時期）について解明がおこなわれなければならない。その時間の中で起こった限りの出来事は、一人の人間についてであれ、二人以上の人間についてであれ、取り上げられるが、それらの出来

事の一つ一つが相互に関係を持つのは偶然による。というのは、たとえばサラミスの海戦と、カルタゴ人に対するシケリアでの戦いは同時に起こったけれども、決して同一の結末を目指したものではなかったのと同様に、連続する時間の中である出来事が他の出来事の後に続いて起こっても、これらの出来事から一つの結末は決して生じないことがよくあるからである」(23, 1459a19-29)。

この箇所では、叙事詩と歴史とが対比的に論じられているが、叙事詩に関しては悲劇と同様に「行為の統一」が重んじられているのに対して、歴史に関しては「時間の統一」が重要とみなされているのである(3)。叙事詩は悲劇と同様に、因果関係にもとづく行為の緊密な統一が要求されるので、これを基準とするもろもろの出来事の取捨選択が行われなければならない。たとえば、ホメロスがトロイア戦争の中からその一部を取り上げて『イリアス』を制作したことを賞賛していることからも明らかである(23, 1459a30)。このような詩人による仕事には、出来事の取捨選択という詩人の「制作的」な特徴があらわれているといえよう。対して歴史の方は、サラミスの海戦とカルタゴ人に対するシケリアの戦いが同時に起こった事件であるため、同一の結果に向かって収束されることがないにもかかわらず、無差別に述べられなくてはならないのだ。したがって、このような歴史には、「事実」をありのままに語ろうとするいわば非制作的な特徴があらわれているといえよう。

以上、第9章と第23章における論旨から明らかなことは、詩作が「制作性」「普遍性」「優位」「行為の統一」という特徴を示すのに対して、歴史は「事実性」「個別性」「劣位」「時間の統一」という特徴を示すということである。ここで優劣の問題ははずすとして、アリストテレスの想定する「詩作」は詩人によって作られる「制作的」なものであるがゆえに「普遍的」な出来事を「行為の統一」を通じて語るものであるのに対して、「歴史」は歴史家が「事実」にもとづいて語るものであるがゆえに「個別的」に起こった出来事を「時間」に沿って記すものである、と理解できる。

このような条件の下でなお「歴史」と呼べるものは、一定の時間内における出来事の網羅的な叙述のことであると考えられる。それは、ある特定の年代に起こったことを網羅的に述べる「年代記」のようなものであるか、または一個人の人生において生じたことを網羅的に語る「私伝」のようなものであろう。

確かに、上記のようなアリストテレスの提示する「詩作」と「歴史」の特徴は、強ち間違ったものではないかもしれない。だが、このような特徴から明らかとなる「詩作」及び「歴史」は、きわめて図式的なものであり、このような「詩作」や「歴史」というものが、文字通りそのまま、実際の「詩作」や「歴史」と呼ばれているものをあらわせているかは疑問である。

例えば、「歴史」に関して見てみるならば、それがいくら網羅的な叙述を理想としたものであったとしても、完全に「網羅的に」述べるということは不可能である。たとえ、ある一定の時間内やある一個人に関して、という条件付けをしたとしても、完全に網羅的な叙述というものはできず、歴史家による何らかの取捨選択が必然的になされてしまうことは確かである。このことからも、アリストテレスの提示する「歴史」が実際の歴史的叙述にそのまま当てはめられないものであるということは明らかである。つまり、全く厳密な意味での「時間の統一」はなしえないといえる。

また、たとえ実際に起こった出来事であったとしても、事実そのままをとどめて「歴史」として再提示するということは不可能である。叙述という形式をとり再提示することにともなって、何らかの変容がなされているということは否定できない。したがって、「事実性」という点から考えても、どれほど「事実」を述べられているかはわからない。

さらに、「歴史」が単純に「個別性」を狙って述べられているものであるともいい難い。実際、ツキディデスは『戦史』第1巻の序文において以下のように述べている。「一方で、私のこの史書には物語的要素（μυθῶδες）がな

く、これを聴いてもおそらく楽しめるところが少ないと思われるだろう。だが他方で、今ここに起こったこと（τὰ γενόμενα）の確実なところを見ようとする人たちがこれから出てくるとき、このようなことやこれに近いことは、それぞれ人間の本性にしたがって、将来にもいつか再び起こるであろうから、そのような場合にも確実なことをみたいと思う人たちが、この史書を有益なものであると判定してくれるならばそれで十分である。これはその場の賞賛ではなく、むしろ永代の財産になるものとして書き綴られたのである」（1, 22, 4）。この箇所からは、少なくともツキディデスは自らの述べる「歴史」に、「個別性」ではなく、むしろ「普遍性」を見出しているということが明らかである。過去において起こった出来事の真相を確かめる場合に有益な叙述として歴史を捉えるのではなく、むしろ未来において似た出来事が起こった場合に、それを考察するのにこの歴史的叙述が有益なものとして役立つということを述べているのである。

以上のようなことが容易に想像できる中、「歴史」に対して「事実性」「個別性」「時間の統一」というこれらの特徴を与えるのは、短絡的であると考えられる。さらに、「制作性」「普遍性」「行為の統一」という「詩作」の特徴も、どれほど詩作の特徴として確保されうるのかは疑問である。二つの叙述に見られるそれぞれ三つの特徴を一つ一つ別々に吟味すると、その各々がどれほどそれらの叙述を説明しえているのかは分からない。しかしながら、その上であえて、アリストテレスはこうした特徴を挙げて「詩作」と「歴史」という二つの叙述を区別しているのである。このことから何を読み取ることができるのか、以下、アリストテレスが念頭においた「歴史」と「詩作」を、具体例を挙げて検討する。「歴史」の例としてはヘロドトス『歴史』を、また「詩作」の例としてはアイスキュロス『ペルシアの人々』を手がかりに考察する。

2．「歴史」――ヘロドトス『歴史』の場合――

アリストテレスが『詩学』において「歴史」として念頭においているものがヘロドトスによる歴史的叙述であることは、第9章の一節にその名が見られることからも明らかである（9, 1451b2）。また、第23章において述べられているサラミスの海戦と、カルタゴ人に対するシケリアの戦いに関する言及も、ヘロドトスの『歴史』（7, 166）からの引用であると考えられる(4)。これらのことから、アリストテレスが歴史家としてヘロドトスを想定しているだろうということは予想される。

方や、ツキディデスに関しては、『詩学』において言及がないばかりでなく、アリストテレスの全著作を通じてもその名が見られることは一度もない(5)。実際には、ツキディデスはアリストテレスと同時代的な歴史家であるから、歴史家としてはむしろツキディデスの方が意識されてしかるべきなのであるが、彼の名を出すことはないのである。

もっとも、先にも述べたとおり、ツキディデスの語る「歴史」からはそれが「普遍性」を目指しているということが明らかである。だからこそ、「歴史」に個別的なものであるという特徴を見出す『詩学』において、アリストテレスが「歴史」の典型としてツキディデスを挙げることはないのだと考えられる。それとは異なり、ヘロドトスは『歴史』の冒頭部において以下のように述べている。「本書はハリカリナッソスのヘロドトスが、起こったこと（*τὰ γενόμενα*）が時の推移とともに忘れられ、ギリシア人や異邦人の果たした偉大で驚嘆すべき事績の数々や、とりわけ両者が如何なる原因から戦いを交えるに至ったかの事情が、やがて人々に知られなくなるのをおそれて、探究したもの（*ἱστορίαι*）を示したものである」（序）。ここでもまた、『詩学』において用いられていた文言と同じく「起こったこと（*τὰ γενόμενα*）」という語が用いられているが、過去実際に起こった出来事をその

ものとして忘却されないように記し残しておこうとする態度が読み取れるだろう。

これはツキディデスの態度と明らかに異なる。ツキディデスのように、過去に起こった出来事と同様の出来事が未来において再度繰り返されるという可能性を見越して、そのときの参考にすべく叙述するのではなく、ヘロドトスはむしろ、過去に起こった出来事を過去に起こった「個別的」な出来事のままとしてとどめることに意味を見出したのである。

では、「時間の統一」に関してはどうであろうか。ヘロドトスの叙述は、その主題を一つのペルシア戦争というものに置き、これにまつわる出来事を叙述してはいるものの、その中には地誌的な要素や風俗的な内容も含まれ、これらによって論述が中断を余儀なくされることも多い。また、ツキディデスの編年史的な記述に比べると、ヘロドトスの『歴史』では年代の枠組みも判然とせず、地域に関しても転々としていて、構成上の統一がとれているとはいい難い。「歴史」ということで時間に沿った網羅的な叙述を想定するならば、比較的ツキディデスの方が当てはまり易いくらいである。

しかしながら、『詩学』において「歴史」として念頭に置かれているのはヘロドトスである。それは、アリストテレスが「歴史」に要求する「時間の統一」が、単に時間系に沿った出来事の羅列という意味にとどまるものではないということを示していることになるだろう。ヘロドトスがツキディデスと大きく異なるのは、ある一定の時間内において起こった出来事をくまなく述べるという姿勢である。ゆえに、このように表現された事実の網羅性が持つ統一性こそが、アリストテレスが「歴史」に求める「時間の統一」であるといえる。では、その統一性とは如何なるものであるか。それはすなわち、個別的な出来事をありのままに示すことによって獲得される、事実性を支えとした出来事の統一性なのである。

ヘロドトスとツキディデスを比べたとき、先ずもって印象につくのは、ヘロドトスが物語や説話的な要素をそ

の歴史に盛り込むのに対して、ツキディデスはこれを積極的に排除しようと努めるところである。先にも述べたが、ツキディデスは序文において自らの歴史的記録から物語的要素（μυθώδες）を省いているという内容を語る（1, 22, 4）。これはヘロドトスを意識しての言及であると考えられる。ツキディデスは自らの綴る歴史の事実性を保つために、不確実な要素を徹底して排除しようとするのである。他方、ヘロドトスはというと、その歴史には多くの説話が含まれるとキケロやディオドロスに言われ(6)、さらにベルンハイムによってもそれが物語的歴史と言われるほど(7)、物語や説話的な要素を自らの語る歴史に持ち込む。これは、一つ間違えれば、「歴史」としての事実性を失いかねない行いである。しかしながら、ヘロドトスは物語や説話的な要素も不確実なものとして不確実なままに示そうと努めたのである。例えば、第1巻の初めではペルシアとギリシア諸国との抗争がギュゲスの時代にまで遡り、いわば言い伝えの形で原初的な伝説時代から書かれている。このように判然としない古い時代に遡る出来事に関しても、自国の歴史において特筆すべき重要な事跡であれば、見聞をそのままに書き綴るのである。したがって、「私はしかしそれらのことについて、その経過がそのとおりであったのか、あるいはそれと違っていたのか、ということを論じるつもりはない」（1, 5, 3）と述べている。伝説時代に遡り物語的にしか語ることのできない出来事が述べられていたとしても、それは不確実な物語を鵜呑みにして述べているというわけではないのである。自国の成立において見落とすことのできない内容だからこそ脈々と語り継がれてきたのだという事実を、実際に起こった出来事として記録するために持ち込んだ叙述である。判然としないものに関して、判然としないということを記録しておこうとしているのだ。対して、ツキディデスは物語的要素を一切持ち込まないように努めている。ツキディデスにおいては、判然としない物語や物語的にしか述べられない事柄は、歴史から排除されるわけである。

このように見ていくと、物語的要素を自らの記録より排除しようとしたツキディデスの叙述に劣らず、ヘロド

トスの叙述からは多くの起こった出来事を読み取ることができるだろう。ヘロドトスにとって、歴史の事実性を支えるものは、出来事の叙述の網羅性である。そして、この網羅性こそが、事実性という支えによって成り立つ「時間の統一」なのである。つまりヘロドトスにおいては、「個別的」な出来事の網羅性、歴史の「事実性」、「時間の統一」という三項は、切り離すことのできない緊密な関係を持っているといえよう。そして、このようなヘロドトスの態度にこそ、アリストテレスは歴史家の典型を見出したのである。その反面、ツキディデスの態度には、出来事の取捨選択が垣間見える。もちろんのことながら、ツキディデスには、自らの歴史に対して事実性を獲得するために、不確実なことを排除しようとする、歴史家としての誠意が見られるわけであるから、これを非難するのは不適当なことである。だが、アリストテレスの念頭においていた「歴史」には、ヘロドトスの叙述の方がはるかに適したものであったに違いない。

以上のことから、アリストテレスが『詩学』において「歴史」の典型として挙げたヘロドトスには、「個別性」「時間の統一」「事実性」という三つの特徴がアリストテレスの要求に沿う形で示されていたことが明らかである。また、このような「歴史」の特徴は、各々切り離して考えることのできない密接なものであり、各々の特徴を別個に見ても意味をなさないが、それらを複合的なものとして一まとめに捉えるとき、はじめて「歴史」概念を説明するに足るようになるのである。さらに、「歴史」のこのような特徴を『詩学』において述べることにより、「歴史」に対して歴史家の主体的な介入を認めないアリストテレスの立場が明らかとなる。このような、消極的な歴史観のもと、「歴史」の特徴を語ることにより、詩人の仕事に対する詩人の主体的な関わり方を示そうとしているのである。

以下に、詩人の仕事を、具体例としてアイスキュロス『ペルシアの人々』を手がかりに見ていく。

3．「詩作」――アイスキュロス『ペルシアの人々』の場合――

ヘロドトスがペルシア戦争に主眼点を置いた「歴史」を記した人物であるとするならば、その同じ題材に依拠した「詩作」をなした人物として直ちに思い起こされるのは、アイスキュロスである。以下に、ヘロドトスとの比較によって、詩人の仕事が具体的にどのようなものであるのか、アイスキュロス『ペルシアの人々』を通じて見ていく。

アイスキュロスは『ペルシアの人々』において、ペルシア戦争の記録を悲劇という形で提示した。この作品が上演されたのはサラミスの海戦後八年経たときである。この戦争に自らも参加したアイスキュロスの生々しい記録は、作品の至るところに迫真の描写として見受けられるが、大国ペルシアの敗北はギリシアにとってまさに予想だにしない出来事であり、このことの原因を悲劇の観点から探ろうとするアイスキュロスの詩人としての試みは、見逃すことのできないものである。さらに、上演当時ギリシアはまだペルシアと交戦中であり、そんな渦中の上演ということもあって、この作品がギリシア人に与えた感慨は一入であったと考えられる。

確かに、アイスキュロスの作品は古典的な悲劇作品である。だが、アリストテレスの『詩学』においては、ソフォクレスやエウリピデスの作品よりも理想的な悲劇だとはみなされていない。というのも、その構成が「古典的」であるがゆえに単調なものとなってしまっていることは否めないからである(8)。

にもかかわらず、興味深いことには、この作品がアリストテレスにおける詩作の三つの特徴、すなわち「普遍性」「行為の統一」「制作性」という特徴をすべてそなえているのである。

第一に、この作品は個別的な歴史的事件を題材としてはいるものの、最終的には人間一般に妥当するような事柄を述べようとしているという点において、「普遍性」が志向されていると考えられる。

第二に、この作品は、『詩学』において悲劇のミュートスに求められているような要素が見られないにもかかわらず(9)、実際には「行為の統一」という観点からも、明らかに詩作としての特徴を有していると考えられる。

第三に、舞台をペルシアの都スーサに設定し、ペルシアの側に視点を置いて描くことによって、ギリシア人が自国の出来事を描くことでは得られないような「制作性」が付与されていると考えられる。ギリシアにとって、強国ペルシアの敗退は、非常に強烈なものであった。ゆえに、こうした舞台設定を利用することで、自国の「歴史」としてペルシア戦争を「ありのまま」に語ろうとするヘロドトスとは全く異なった、「詩作」の有する制作的なアプローチが可能となるのである。

以下、これら三つの特徴について、順に検討していこう。

先ず、この作品にあらわれる「普遍性」についてである。確かに、この作品は歴史的な出来事に題材を得ている。だが、アイスキュロスがこの作品において個別的な叙述を目的とはしていなかったことは明らかである。実際、『詩学』第9章では、詩作の題材として何が何でも伝承上の物語を扱おうとする必要はないし、題材自体を制作しても構わないことが述べられ(9, 1451b19-26)、さらに、「すでに起こったこと(*γενόμενα*)を詩作することがあっても、彼が詩人であることに何のかわりもない。事実、すでに起こった出来事のいくつかには、起こりそうなものであることを妨げるものが何一つないのであり、まさにそれゆえに、彼はそのような出来事の詩人となるのである」(9, 1451b29-32)と述べられている。過去に起こった歴史的な出来事を題材として扱ったとしても、そのこと自体で詩人の目指す「普遍性」が妨げられるわけではない。アイスキュロスの作品は、ヘロドトスに見られるような歴史的叙述ではない。それは、出来事の網羅的な叙述ではないということからも明らかである。アイスキュロスの作品は、歴史的な「個別」の事件を通して、むしろ「普遍」を示そうとした制作的なものであるということができるからである。

実際、『ペルシアの人々』では、ペルシア戦争での顚末が使者の口によって語られてはいるものの、登場人物の設定からしても、ダレイオスの亡霊を登場させるといった創意工夫が見られる。実際に何がペルシア軍に起こったのか、その様は使者によって語られるが、クセルクセスの行いが暴勇であり傲慢であったということは、ダレイオスの亡霊によって知らしめられる。現実世界に存在しているものとして描かれている使者が語るのは、あくまで個別的な出来事である。けれども、現実世界に足場を持たない死せる存在であるダレイオスが語るのは、人間一般に妥当する普遍的な事柄である。だが、この個別性から普遍性への移行には、大きな断絶があるようにも思われる。その断絶を埋めるものとして、この作品中における「ヒュブリス（ὕβρις）」の扱いに注目したい。というのも、『ペルシアの人々』では、この「ヒュブリス」が、詩作の要素である「普遍性」と「行為の統一」を繋いでいるように思われるからである。

先にも述べたとおり、『ペルシアの人々』には『詩学』において論じられるような悲劇のミュートスに要求される要素が見出せない。例えば、ミュートスに要求される認知といった要素はなく、クセルクセスの認識は使者の口によって告げられる。逆転に関しても、クセルクセスの意図とは予想外の行為の変化は、クセルクセス自身ではなく使者の報告によって示される。また、舞台上の人物が主な出来事に巻き込まれることはなく、ミュートスにおけるあらゆる要素が典型的な形ではこの作品に見られないのである。しかしながら、『ペルシアの人々』に見られる「ヒュブリス」の問題を考えるとき、この作品もまた、詩作としての緊密な統一、すなわち「行為の統一」を有しているということが明らかになる。

悲劇作品において問題となるヒュブリスは、神々に対する冒瀆、侮辱、軽視、不敬に見られる人間の思い上がり、過信、自知や思慮の欠如のゆえに、神々の怒りや懲罰をまねき、最終的には破局や没落が必定とされるようなものとして受け止められてきた(10)。このような状態を、「ヒュブリス」という語をそのまま用いて作品内に示し

ているのが、アイスキュロス『ペルシアの人々』である。フィシャーはこの作品を「本来的にかつまた十分な仕方でヒュブリスを基礎におく作品」であると述べている(11)。

『ペルシアの人々』では、ダレイオスの亡霊がアトッサに向かい、クセルクセスの振る舞いをたしなめて以下のように語る。「やがて、最大の苦しみが軍を襲うであろう。それはヒュブリス（ὕβρις）と神を忘れた尊大（φρόνημα）の報い（ἄτολμα）なのだ。彼らはギリシアを襲い、恐れもなく神々の像を奪い取り、御社は燃やされた。祭壇は崩れ落ち、もろもろの御神体も御社も根こそぎにされ、建物は滅茶苦茶に土台から崩されている。彼らはその悪業の報いに相応しい苦しみを身に受けるのだ。だがそれは先のこと、今はまだ災悪の底にはいたらず、やがて災禍は満ち満ちて、殺戮で血塗られたものがどれほどプラタイアの野を攻めるドーリスの槍先に捧げられることか。屍の山は三代の末にまで声なき戒めを知らしめる。死すべき身でありながら、分を超えて思いをめぐらせるべきではない。ヒュブリス（ὕβρις）は花をつけ、迷妄（ἄτη）の穂を稔らせ、収穫の時期にはとめどなき涙を刈ることになろう。このことわりをよくわきまえて、アテナイとギリシアのことを忘れてはならぬ。過度に思い上がってはならず、他人の持ち物を欲する余りに、目の前の幸せを失うことなかれ。ゼウスの神は、あまりにも出すぎた驕りの心（ὑπέρκομπον φρόνημα）を罰する厳しい裁き手（κολαστὴς）である。重々しく戒めよ。正しき言葉により、これらをわが子に忠告し、過ぎたる暴勇（θράσος）と瀆神（θεοβλαβοῦν）を鎮めるのだ」(807-831)。

この文脈では、ヒュブリスという言葉とともに、尊大、瀆神、迷妄、暴勇、驕りの心、裁き手、報いなどの一連の言葉が用いられている。ここでは、クセルクセスの敗北が予測され、その行動をダレイオスの亡霊が厳しく戒めている。だが、アイスキュロスの描いたヒュブリスは、決して、この戦いのみに妥当するようなものでもなければ、この戦いにまつわる人間関係にのみ限定されるものでもない。つまり、個別的な次元に限定されるよう

なものではないのである。むしろ、ペルシア軍による侵略の企図の中に、そもそも人としての分を超えた貪欲さや、神ともみまごうほどの独占的な欲望を見ているのであり、これが単なる侵略を超えて神々への冒瀆や不敬に繋がる挙動に及ぶヒュブリスに化しているということまでをも見ているのである。アイスキュロスは、ペルシア軍が単に戦略や戦術によって敗北を帰したわけではなく、神々を冒瀆するまでの尊大さによって敗退したのだという原因を、ヒュブリスの中に見ようとしているのである(12)。

アイスキュロスがヒュブリスをこのような描き方で主題としていることからも、この作品において彼が人間一般に妥当する普遍性を示そうとしていることは明らかである。また、悲劇作品におけるヒュブリスとは、一般に、人間による行為の選択がまねいた災悪を示すものであるが、これをペルシア戦争から汲み取ろうと試みたアイスキュロスは、詩作全体がもろもろの行為によって示されるヒュブリスへと統一されていく様をあらわしているといえよう。したがって、この作品では、もろもろの出来事という個別的な事象を、ヒュブリスによって統一し、ヒュブリスによるこのような「行為の統一」をもって、人間一般という「普遍的」な事象へと結び付けているのである。

最後に、『ペルシアの人々』の中に「制作性」が如何にしてあらわれているかを見てみよう。この作品では、舞台がペルシアの都スーサに設定されている。ペルシアの側に視点を置いて描かれているという点は、詩人の仕事が有する「制作性」をよくあらわしているといえよう。それは、自国の「歴史」としてペルシア戦争を単に「事実的」に語ろうとするヘロドトスとは、全く異なった描き方である。当時、ギリシア人にとってペルシア帝国は広大な領土を誇る大国であり、通貨を鋳造し交易を積極的に推進させ、経済面においても文化面においても先進的で、決して敵うことのない強力な存在であった。そのような、ペルシアの人々がクセルクセスの抱いたヒュブリスに起因して戦いに敗れていく様は、アリストテレスが『詩学』第13章において示したような恐れと憐れみと

を与えるだろう。第13章では、以下のように語られる。「なぜなら、憐れみは、不幸に値しないにもかかわらず不幸におちいる人に対して起こるのであり、恐れは私たちに似た人が不幸になるときに生じるからである」(13, 1453a4-7)。本来ならば不幸に値しない者が、自らの過ちによって不幸になるとき憐れみが生じる。また、神話的英雄的人物ではなく、むしろ我々に似た現実的な人物が不幸になるとき恐れが生じるのである。そして、このような恐れと憐れみから、悲劇固有のよろこびが生じる。この作品においては、クセルクセスという本来ならば戦いに勝利してしかるべき人物が、そのヒュブリスによってペルシア軍を大敗北に導く。ヒュブリスに翻弄されるクセルクセスは、ギリシア人にとって本来貴い人物であり、かつ、我々に似て現実的な人物でもあった。だからこそ、畏敬の念と共感が生まれ、恐れや憐れみが人一倍引き起こされるのである。そこから悲劇に固有のよろこびが生じる。このとき、クセルクセスの抱いたヒュブリスは決してこの戦いにおいてのみ抱かれるような個別的なものとして理解されるわけではない。むしろ、我々自身にも起こりうるような普遍的なものとして共感を呼ぶ。それゆえ、このようなヒュブリスを描くための場面設定をなしたアイスキュロスには、詩作に固有のよろこびを目指す詩人の制作意図がよく示されていると考えられる。

以上のことから明らかとなるのは、以下のことであろう。詩作における三つの特徴であるところの「普遍性」「行為の統一」「制作性」は、相互に切り離せない関連性を有している。そしてこれらは、ヒュブリスを媒介にしつつ相互に関連する。普遍性はヒュブリスを経由することで個別性を抜け出ることができるのであるし、行為の統一は多様な出来事がヒュブリスの下に統一されることであらわれるものであった。そしてこれら二つを実現するものが制作性なのである。

結

アリストテレスが「歴史」を語る場面は、「詩作」の特徴を明確にするためのものであった。よって彼自身にとっては、歴史は詩作よりも劣位に置かれるものであり、それ自体として独立して考察する価値のないものであったといえるだろう。歴史の特徴である「事実性」「個別性」「時間の統一」という要素は、詩作の特徴である「制作性」「普遍性」「行為の統一」という三つの要素を浮き彫りにするために提示された。したがって、『詩学』においては「歴史」の三つの要素が「詩作」との対比において対立的に示されることはあっても、「歴史」という叙述を単独で見たときに、三つの要素が如何に相互に関係しているのかということについては触れられていないし、おそらくその必要すらなかったのである。

だが、これらの要素は、実際には相互に独立した個別的な項とはいえないだろう。というのも、アリストテレスが歴史の典型と捉えていたヘロドトスにおいて、「時間の統一」は「個別性」によって特徴付けられるようなもろもろの出来事を、「事実性」を媒介にして網羅的に統一したものであるといえるからである。このように捉えるとき、詩作に対して劣位と位置づけられた歴史といえども、その要素は相互的に関連した、一個の体系をなしているのだといえよう。

詩作においても、事態は同様である。ヘロドトスと同様の題材を用いたアイスキュロスの『ペルシアの人々』では、「制作性」「普遍性」「行為の統一」という詩作の要素は、ヒュブリスという媒介を通してでなければ成り立ちえないものであった。すなわち、これら三つの要素は、ヒュブリスという概念を通して緊密な関連性を保持しているということができるだろう。

確かに、『詩学』では「歴史」をそれ自体で独立したものとして扱うことは困難であった。というのも、『詩学』

において言及されている「歴史」の特徴としての事実性は、実際には尽くすことのできないはずの網羅性に依拠していたからである。したがって、このような事実性に支えられる「歴史」を峻別することは困難であった。だが、「詩作」同様、「歴史」もまた一個の体系をなすものとして『詩学』において捉えられるということが明らかとなった今、『詩学』において「歴史」と「詩作」とを別個の体系として区別することには、やはり意義があったといえるだろう。

『詩学』第25章には、「詩作の技術における正しさは、国家のための技術の正しさと同じではなく、さらに他の如何なる技術における正しさとも決して同じではない」(1460b13-15) という一文がある。これは、詩作に要求される正しさが他のものからは区別されるということを示し、詩作の自立性を尊重する主張であるとして、これまで評価されてきた文言である。この記述からも明らかなように、「歴史」と「詩作」とはそれぞれ別個の基準によって判定されるべきものなのである。そして、『詩学』で述べられている「歴史」を一つの体系をなしているものとして捉えることにより、「詩作」の自立性はよりいっそう際立つのである。

〔参考文献〕

Bernheim, E. *Einleitung in die Geschichtswissenschaft*. Leipzig : G. J. Goschen, 1905.

Bywater, I. *Aristotle on the Art of Poetry*. Oxford : Clarendon Press, 1920.

Fisher, N. R. E. *Hybris* and Dishonour : II, *G&R*. 26 (1979) 32-47.

Hude, C. *Herodoti Historiae*. I. Oxford Classical Text. Oxford : Oxford University Press, 1972.

Jones, H. S. *Thucydidis Historiae*. Oxford Classical Text. Oxford : Oxford University Press, 1953.

Kassel, R. *Aristotelis De Arte Poetica Liber*. Oxford Classical Text. Oxford : Oxford University Press, 1988.
Kenyon, F. G. *Aristotelis Atheniensium respublica*. Oxford Classical Text. Oxford : Oxford University Press, 1976.
Keyes, C. W. *De Legibus*. London ; Heinemann Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1970.
Lucas, D. W. *Aristotle Poetics*. Oxford : Clarendon Press, 1968.
Page, D. *Aeschyli Septem quae supersunt tragoedias*. Oxford : Clarendon Press, 1972.
Ross, W. D. *Aristotelis Physica*. Oxford : Clarendon Press, 1950.
Welles, C. B. *Diodorus of Sicily*. Loeb Classical Library. Cambridge : Harvard University Press, 1970.
當津武彦、『アリストテレス「詩学」の研究　下』、大阪大学出版会、2000年。

〔註〕

（1）『詩学』という表題にもかかわらず、またその冒頭において、詩作の種類について論じるつもりであるという旨を述べているにもかかわらず、現存の『詩学』では詩作全般を扱うことはなく、もっぱらその対象は悲劇と叙事詩とに終始する。つまり、アリストテレスは、悲劇こそ再現による詩作の可能性を実現したものだと考え、悲劇について論じることが、詩作そのものを論じることにほかならないと考えていたからである。

（2）1447a12 *κατὰ φύσιν*　『自然学』第1巻第7章189b31-32でも、「というのは、はじめに共通の問題を語って、次に個々の特殊な問題を考察することが自然な順序であるからだ」と述べられている。

（3）『詩学』においては、叙事詩はあくまでも悲劇と同様に「詩作」として扱われることに注目しなければならない。いくら叙事詩が歴史的な題材を扱おうと、それが「歴史」とみなされることはない。

(4)　Cf. Bywater, 1920, p.306.

(5)　Cf. Lucas, 1986, p.118.

(6)　たとえば、ディオドロスはヘロドトスのことを「人の心を魅了するために、奇怪な事柄を語り、歴史の名の下に説話を作った」(1, 60, 7) と述べており、また後にキケロも「歴史の父ヘロドトスにも、無数の説話が含まれている」と評している。Cf. Cicero, *de Legibus*, 1, 1, 5.

(7)　Cf. Bernheim, 1905.

(8)　『詩学』において論じられているもっとも優れた形の悲劇は、紀元前四、五世紀の悲劇の考察にもとづき、理論的に考えられたものである。したがって、実際の悲劇の中に完全な形でアリストテレスが提示する優れた悲劇の特徴を見出すことは難しい。しかしながら、『詩学』ではソフォクレスやエウリピデスの作品が、より理想的なものに近い形で登場している。だが、それらと比べても、アイスキュロスの作品はきわめて単純な要素からなる単純な構成をしており、たとえば、役者の人数に関してもアイスキュロスが一人から二人に増やしたのであり、ソフォクレス以降は三人で構成されることが通例で、このような点から考えても、アイスキュロスの作品はアリストテレスの提示する悲劇の優れた形にはあてはまり難いのである。

(9)　『ギリシア悲劇全集』第2巻月報掲載、メイ・J・スメサスト「『ペルサイ』――筋のない悲劇の魅力」を参照。その中で、スメサストはこの作品を、『詩学』で述べられているような「筋（ミュートス）」を満たす要素を持たない悲劇だとして、「筋をもたない悲劇」と呼んでいる。

(10)　以下、悲劇における「ヒュブリス」に関しては、當津, 2000.に詳しい。

(11)　Cf. Fisher, 1979, p.37.

(12)　対して、ヘロドトス『歴史』においては、ヒュブリスが信託や予言の形で語られる。サラミスの海戦直前の場面に

おいて、バキスの信託は「尊きディケーの神は、ヒュブリスの子にして粗暴なる飽満が、ものみな飲みつくさんものと猛り狂うを鎮めたまわん」(8, 77) と告げ、ゼウスと勝利の女神がギリシアに自由をもたらすであろうことを予言する。また、これはペルシア軍のヒュブリスに神の懲らしめが加わるであろうことを前提としている。しかしながら、このようなヒュブリスは、あくまでも、信託や予言という形で実際に起こった個別的な出来事としてのみ示されるのである。